

光陰似箭

毛沢東と火葬

(東京大学) 村田雄二郎

少し気のはやい話だが、明けて1993年は毛沢東の生誕百周年にあたる。昨今の大陸では、政治社会の急変にともなう人心の不安を反映してか、「毛沢東熱」が高まる一方だと聞く。『紅太陽』——ポップス調にアレンジされた語録歌、それに車中の安全祈願の御守り札。その死とともに一度は神棚から降りたはずの人間が、十余年たって神通力を回復したということか。事かの「偉大な領袖」に限っては、「棺おほを蓋いて論定まる」とはなかなかいかないらしい。

そもそも天安門広場の中央に眠るその遺体にはいまだ棺が蓋われていないではないか、といえは悪い冗談にも聞こえるが、生前は率先垂範して火葬に与していたはずの当人にとってみれば、水晶の柩の中で十二億の民の視線にさらされるのは、確かに不本意な事態かもしれない。

毛沢東が自身も含めた中央政界の指導者の死後火葬を提唱したのは、1956年4月27日のこと。近着の『建国以来毛沢東文稿』第六冊（中央文献出版社、1992年1月、内部発行）に収める「倡議実行火葬」の一文によって知られる。原件は中央檔案館に保管されており、対外的に（半）公開されるのは今回が初めてであろう。

「倡議書」成立の経緯ははっきりしない。『文稿』の注釈者によれば、この文書には毛沢東以下、朱徳、彭徳懷、康生、劉少奇、周恩来、彭真、董必武、鄧小平ら党内外人士136人の署名があるという。また、1959年2月10日に陳雲が楊尚昆にあてた手紙の一節は次のようにいう。自分は数年前の中央委員会総会に欠席し、死後火葬の自発的署名に参加する機会を得なかった。火葬には賛成なので、今回改めて署名者の列に加わりたい、云々。

いかにも、現体制を支える存命の長老に対する編集サイド（中共中央文献研究室）の細大もらさぬ気配りは見事である。とはいえ、注釈文には望蜀の怨みなしとはしない。陳雲書簡によれば、くだんの火葬倡議書は毛沢東の発案により、1956年4月27日前後に開かれた中共中央委員会総会で賛同者が署名し、その後党内外の人士にも署名の輪が広げられたということになる。ところが、この時期に中央委員会総会が開催された事実はなく、陳雲書簡にいう会議がいつのものを指すかは、『文稿』を読む限り不明である。

1956年4月27日といえば、毛沢東が中共中央政治局拡大会議で、後日「十大関係論」として知られる重要講話を行った翌日である。ほどなく5月2日には、最高國務会議で同じ主旨の講話が行われ、「百花齊放、百家争鳴」のスローガンが提起されている。つまり、毛沢東が「中国型社会主義」建設に向けて大きく一步を踏み出すのと時を同じくして、この火葬倡議書は起草されたのである。

ところで、肝心の火葬の是非について。倡議書ではいかにも唯物論者にふさわしく、「土葬は耕地を占用し、木材を浪費する。加えて、わが国歴代の封建的支配階級は厚葬久喪を礼法としたため、多くの家庭が死者埋葬のために破産に陥っている」と、火葬こそ最も合理的な葬法であると推奨されている。耕地の効率的利用や埋葬費用の節約を理由に火葬が正当化されるのは、今日の「節約土地」のスローガンを見ても十分うなずけるところだが、こうした議論がその後中国の農村地域に果してどれほど浸透したのか（あるいはしなかったのか）大いに興味をそそられる問題である。

倡議書への署名者のうち、周恩来は望み通りに骨灰を空中から散布され、毛沢東は土葬も火葬もされず、ただ一人天安門の象徴空間に眠り続けている。

さて、残る健在の署名者の葬法やいかに？